

### 第三章 大悟の体験における二存在

禅師が解脱した「仏の観点・正法眼・悟りの心」の境地には、二つの体験の見方があることは、問題視されていない。悟りの境地には二つの内証の体験が存在するのである。禅師が当に観たときの森羅万象の世界は、どのような境地であったのかである。大半の解説者は、有時で説かれている世界其の儘であり、疑念がない。覺りの体験には頓悟と円頓が存在する。禅師の身心脱落は頓悟なのか円頓なのかはまだ明確ではない。私自身は円頓であると考えている。道元禅、正法眼蔵九十五卷の注解とも密接に関わっている。

曹洞宗の西有禅師は『正法眼蔵 啓迪』下巻「諸法実相」の中で、十如是の解釈には二つがあることを示されている。

「天台では是相如という時は空諦、相如是は中諦、如是相は仮諦で仮空中の三諦が此の中にある。いわゆる円融の三諦じゃといい、また如とは空なり、是とは有なり、色即是空、空即是色の義などという。講釈はそれでも済むが、わが境界において一分の功德がない」

西有禅師によると、十如是の読み方には、天台の円融三諦と般若心経の隔歴三諦の二つが存在することが理解できる。

本来、禅師の教えは円頓・頓悟も脱落した教えである。しかし、有時の巻を時間論で説くか、空間論で明らかにするかは、教義の理解において重要なのだ。

#### 1 禅宗と天台宗

頓悟とは、速疾に証悟すること。即ち悟りの心を得ることであり、浅から深へと段階的に修行し悟るのではなく、速疾に大悟することである。中国禅・日本の禅宗が特に重視する教えである。教学の軸にあるのは『華嚴経』・『円覚経』・『大乘起信論』である。円頓は中国天台宗の開祖天台智顛大師が説く教えであり、経典は、『法華経』である。円頓と頓悟との体験の差異がどこにあるかである。

天台宗では『華嚴経』・『円覚経』・『大乘起信論』の教えを、別教と呼び空と仮の即を隔歴三諦等々と説く。其れに対し、天台は円融三諦の教えであり、即空・即仮・即中の円融三諦である。禅師の身心脱落は別教か円教の悟りの体験かである。

始めに、頓悟から述べてみよう。初唐代華嚴教学の大成者法蔵(六四三—七一二)が説く『妄尽還源観』で明らかにしてみる。

「海印と言うは真如本覚なり。妄尽き心澄み、万象斉しく現ず。猶大海の風に因りて浪を起すも、若し風止息すれば、海水澄清にして象として現ぜざること無きがごとし」

海印三昧は、華嚴経の悟りの世界の境地である。分かりやすく説けば、自己の内在に大海の悟りの清浄心の世界があり、自己の分別する妄心によって、大海が波乱するのである。坐禅をすることによって、妄念が静寂の境地にいたる。万象が明鏡止水の海面上に映るのである。華嚴経では月が、理であり、映る自己、万象が事である。

亦、『大乘起信論』(馬鳴、伝)は、自らの心の本性である、自性清浄心をこのように説明している。

「大海の水の風に因りて波動ずるに、水相と風相とは相い捨離せざるもの、而も水は

動相に非ざれば、若し風にして止滅するときは、動相は則ち滅するも湿性は滅せざるが如云々」

大海は自らの心の本性の清浄心(覚りの心・仏の心)のことである。本来は明鏡止水であるが、無明(凡夫の心)の風によって、水が波動相となる。仏の境地になれば明鏡静寂となる。大海の水の本性は滅することなく、不滅、不進行、不生滅である。海の理は不滅、不進行、不生滅、事は生滅、進行、生滅である。華嚴経や起信論の教えは挙体全真とも呼ばれている。縦軸を中心とした時空論である。根底に大海が存在し、宇宙一切が起顕する宇宙論なのである。

其れに対し、円頓止観とは、天台大師の『摩訶止観』巻第一の上「いかなるか円の信なりや。一切の法は即空・即仮・即中なり、一二三なくしてしかも一二三なりと信ず」・「いかなるか円の行なりや。一向に専ら無上菩提を求め、辺に即してしかも中、余に趣向せず、三諦を円かに修して、無辺のために寂せられず有辺に動ぜられず、不動不寂二して中道に入る(『摩訶止観』上。関口真大、校注、岩波文庫、一九八年九月十二月十八日)

天台の教えは、別教のように、根底に空・月の大海が存在するのではなく、並列円融であり、三諦円融、一心三観・一念三千論、正観、とよばれている。一心とは自己の一念が空即仮中で構成されている。空とは月のことである。仮は自己、万象を示している。中とは中道、第一義諦のことである。空即仮の中とは、円融、調和、空にも仮にも偏りが無く、中諦である。

禅師の身心脱落の大悟が、二つの悟りの体験のうちの別教か円教かである。有時巻を解説する基本観点も異なる。

## 2 隔歴三諦と円融三諦

多田孝正『法華玄義』(仏典講座、二六、大蔵出版、昭和六十年五月一日)「一境三諦、不次第三諦、非縦非横三諦、不思議三諦ともいう。すべての存在は、とらわれる心に因って観られるような実体がなく、空無自性の物であるとする道理を空諦といい、すべての存在は実体がないが、縁によって仮に存在していると、事象を仮のものとして肯定するを仮諦という」

そして、師は隔歴三諦を仮と空と中が個別的に存在すると説明している。其れに対し、円融三諦は、空観・仮観・中観は不即不離の関係にあり、即空即仮即中である。同時同空間で成立しているとも述べている。

隔歴三諦とは空と仮と中は個別的に存在すると説くのは、華嚴経・起信論の教えである。空の月と仮の舟・岸は別体であり一体である。月は不生不滅不進行、舟の自己の身心は生滅進行である。時間論で説けば、月は不生不滅、不進行、静止時間・舟と岸は生滅、進行である。

禅師は『弁道話』「生死をなげくことなかれ、生死を出離するにいとすみやかなるみちあり。いはゆる心性の常住なることほりをしるなり。そのむねたらく、この身体は、すでに生あればかならず滅にうつされゆくことありとも、この心性はあえて滅する事なし」このように説かれている。

そして、死する時は不生の心性のしゅういんし性海に挿入すると説明している。このように、禅師が弁道話の中で、隔歴三諦を月が性海と説き、月は不生滅ゆえに永遠世界である。そして、身心は進行することを明らかにしている。

其れにたいし、禅師は性海、不生滅の隔歴三諦説を、第四十二『説心説性』巻で「心は疎動し、性は恬静なりと道取するは外道の見なり、性は澄湛にして、相は遷移すると

道取するは外道の見なり」この様な教えは外道であると強く否定する。

亦、有時の巻の中で「経歴をいふに、境は外頭にして、能経歴の法は、東にむきて百千世界をゆきすぎて、百千万劫をふるとおもふは、仏道の参学、これのみを専一にせざるなり」と仏道の教えを専一に学ばないからだとも述べている。

禅師の教えは、自己(舟・身心・時)と外頭(岸・時空・時)月(性・不滅)が一体なのだ。月(心性・性海・)が即位置に存在し、自己の身心だけが他の永遠世界に移動することはないのである。

では、禅師の教えが、天台宗の円融三諦と同意なのであろうか。禅師は『宝慶記(道元の入宋求法ノート)』(池田魯参、大東名箸選、一九八八年六月)の中で天台大師をこの様に述べている。「教院都は天台の教観なり。智者禅師ひとり南嶽思禅師の一子となりて、一心の三止三観を稟承し、法華三昧の旋陀羅尼を得たり。～中略～、道元、あまねく教論師の見解を観るに、一代の経律論を解了すること、ひとり智者禅師のみ最も勝れたり。いいつべし光前絶後なり」と天台大師を、経典解釈では空前絶後であると賛嘆されている。禅者として評価されているのだ。

多田師は円融三諦をこのように説かれている。空諦仮諦中諦は即でも離れているわけでもなく一心三観し一体円融している。そして、同じ時間であり、同じ空間である。空とは月のこと、仮とは舟の自己の身心であり、中とは、空の月と仮の身心と時間の進行と宇宙空間は一体円融していると述べている。

禅師は第二十三『都機』巻の中で「《雲駛月運舟行岸移》は「雲駛」のとき、「月運」なり。「舟行」「岸移」なり。そして、雲と月と、同時同道して同歩同運すること、始終にあらず。前後にあらず。舟と岸と、同時同道して同歩同運すること、起止にあらず、流転にあらず」

このように、禅師の教えは、天台の円融三諦と同様に、空の月と仮の舟の身心と岸の世界とは同時間であり、同空間であり、同歩調であると説かれている。この視点に立てば、華嚴経・起信論の隔歴三諦の教義ではなく、円融三諦に近いのである。

では、天台の教えと道元の教義は同意なのであろうか。同じであるならば、立宗する意味がない。山内舜雄『正法眼蔵聞書抄の研究』(大蔵出版、一九八八年九月一日)は、天台と禅師の教義の差異は「中アシカラズを脱落した境地」の不汚染からであることを明らかにしている。中アシカラズとは、坐禅の境地では、不思量でも、思量でもなく、非思量の解脱地からすべて説かれる。中アシカラズとは、垂直正中線の正中の中諦のことである。禅師の教えは、中諦をも脱落し、垂直正中線も透脱した非思量の境地なのである。道元禅はすべて、最初から仏の境地の非思量地から説かれるのだ。

### 3 時間の超越と時間の現成

時間の超越と時間の現成の二つの時間の事象は相対する世界の話である。しかし、悟りの体験時は、相反する世界を同時に覚知するのである。生滅即不生滅・思量即不思量・事即理・生死即涅槃・諸法即実相等々。相対する世界を同時体験することが悟りなのだ。

分かりやすく説明すれば、自己の身心は生から死へと時間が進行する。そして、自ら時間の刻時を停止することはできない。と同時に時間の超越とは、不生滅は進行しないのだから、不滅の世界である。自己の身心存在全体は、時間の進行と同時に不進行で成立しているのだ。

脱落とは、相反する世界の生滅時間を超脱し、不滅の世界を同時に覚知体験するのである。時間の現成とは、脱落し永遠の不滅の世界から、森羅万象の世界を当に観るのである。有時の巻頭の当に古仏から観た、有時高々峯頂立、有時深々海底行、有時大地虚空の世界のことなのだ。

そして、時間の超越と時間の現成の悟りには、隔歴三諦と円融三諦の二つが存在することを、前文で明らかにした。隔歴三諦は、時間を超えた月(不滅・海)と時間の進行の事(身心・波・岸の万象・時間進行)は別体であり、同体であることを説明した。隔歴三諦から当に観る有時世界は、有時高々峯頂立、有時深々海底行、有時大地虚空、一切は、永遠の仏性海からの、現成の有時である。有も仏性海からの現成の存在であり、時も仏性海からの現成の時間である。

それに対し、禪師の有時卷の時間観は、円融三諦であると考えている。不滅(海・レール)即時間即現成(身心・波・岸の万象・時間進行)は一体・中諦、蔵身しているとも述べた。隔歴三諦の有時の時間観は、月の仏性海から波が現われて、有(波)は時なり、時は有(波)なりである。それに対して、円融三諦は、そのまま、時即有(波)、有(波)即時、海即波であり、時であり有(波)である。このように、有時卷の時間の世界を説く基本観点が異なる。